

## 藤田哲司 博士請求論文 「権威過程の基礎的研究」審査報告要旨

最初に、本論文の現代的意義に言及しておこう。社会学創設期から 1970 年代まで、社会的権威について研究は、社会学研究におけるもっとも重要な分野のひとつであった。しかし「ポストモダン」の思想あるいは「高度近代化」の社会理論、さらには現象学的社会学などが社会学の領域において大きな力を獲得していくにつれて、社会的権威についての論考は急速に勢いを失っていった、と論者は主張する。これに対して論者は、現代的社会的状況はあらたな視点に基づく社会的権威の研究を必要としていると主張する。しかしそうした新しい視点の確立とあらたな理論の構築を妨げている責任の一端は、従来の研究にみられる権威概念の曖昧さと多義性に由来し、またそれゆえに従来の諸研究の成果を有効に連結した概念図式の組織化が阻まれていると主張する。論者は本論文において権威概念の整理と統合にかなりの紙数を割き、ていねいに考察していく。その上で、論者は自らの視点の呈示と、ひとつの前提を置いた上で「仮説的推論」を論理的あるいは思考実験的に展開していく。

次に、本論文の構成をしめしておこう。「1 章 局面配列としての権威」、「2 章 権威と敬意 先行研究の継承と敬意作用の位置」、「3 章 既存権威研究」、「4 章 権威に対する私的判断停止 権威持続をもたらす受容者側の問題」、「5 章 権威現象の安定化原理 自発的応諾の持続メカニズム」、「6 章 むすび」からなる論文である。

1 章で、論者は「権威」をどのように理解していくかについて基本的な視点の提起と、その視点を展開するための基本概念の提示を行う。本論文のタイトルから容易にわかるように、論者は「権威」そのものではなく、権威を「社会関係」（「指示の授受関係」）として取り上げる立場を提唱し、しかも本章のタイトルからうかがえるように権威関係を時間の経過における「局面配列」として捉えることの必要性を強調する。すなわち、「権威源泉の創造・関係形成」「加入」（「巻き込まれる」と「入り込む」）、「持続」（「共属的側面と道具的側面」）、「権威の消滅・関係からの離脱」からなる局面の継起が提示される。

さらに、各局面の考察と局面の継起を分析するための基本概念として、論者は「関係上の性質」「関係領域」「担い手 受容者」「他の受容者」、「関係の背景」などの概念を導入する。

2 章（「権威と敬意」）では、指示の正当性と自発的応諾には、権威の担い手に対する受容者の敬意が深く関わっていると指摘したうえで、論者は「敬意は、むしろほとんど『自明』というブラックボックスに封印されつづけ、暗黙の前提とされていた感すらある」と従来の権威研究を批判し、「権威関係における敬意的作用の『方向と位置』を明らかにしなければならない」と主張する。これに続き、受容者側における敬意発生のメカニズムの解明への取り組みがなされる。

3 章では、既存の権威研究のレビューが詳細に試みられる。この中で論者は、多数の権威研究（たとえば、Weber, Michels, Durkheim, Barnard, Simon, Presthus, Blau and Scott, Bochenski, Fromm, Berger and Luckmann, Lukes などの研究）を取り上げ、権威概念の曖昧さを批判しながら、ほとんどの権威研究が共通に取り上げているいくつかの基本的な考えのうち、「受容者の私的判断停止」、および「受容者の自発的応諾」の 2 つの要素を析出し、以下の章においてこれを主題化していく。

4章では、「受容者の私的判断停止」が「権威持続をもたらす受容者側の問題」として取り上げられる。しかし従来の研究の多くはこの問題を、権威の持続的局面における「権威的指示の無条件的受容」としてのみ取り上げ、「権威関係への無条件的な加入の局面」が看過されてきたと主張し、この点について分析を展開する。

5章では、受容者の自発的応諾における持続メカニズムが「依存」「敬意」「役割転換」「受容者側の期待」などの概念を駆使しつつ、5つの仮説として提示される。

本論文の審査会では、いくつかの重要な問題が提起され、かなり激しい議論が展開された。ひとつは、既存の研究にみられる権威概念の考察にかなりの精力と頁数が割れたために、論者自身の提唱する権威関係の社会空間的拡大と時間的発達局面（および過程）についての分析が、具体的な現象の解釈というところまで十分に及んでいないとの指摘がなされた。2つは、「権威関係の持続」という属性を前提に置いて論理的推論をしていく方法を本論文は採用しているが、こうした方法を採用した根拠について論者の説明を求めるといった質問がなされた。3つは、本論文の考察は対人的な相互作用水準（ミクロ水準）における権威関係の考察からはじまり、しかも時間の経過におけるその関係の持続と衰微・離脱に照準化している。しかしとくに4章および5章では、高位の社会的水準（マクロ水準）における権威関係（あるいは権威的組織）へと言及が拡大されるが、異なる社会的次元間にわたる権威関係を議論するための道具立て（媒体や触媒、あるいはメカニズム）が必ずしも十分に整備されていないとの質問がなされた。4つは、提起された5つの仮説が必ずしも経験的検証の可能な形になっていないとの指摘があった。5つは、もし本論文が公開されるような場合には、論文の体裁や文章の読みやすさに十分な配慮がなされるべきとの示唆があった。

権威関係のような基本的社会関係に関するもっとも基礎的研究に対しては、さまざまな理論的ならびに方法論的な立場から異論や批判が提出されるのは当然であり、意見や見解の完全な一致など見込めるはずがない。論者が権威関係の持続傾向に注目して、それがなぜであるのかを論理的に推論する思考実験に取り組み、権威関係を時間的発達と変化の観点から概念図式を提示したこと、さらに、権威関係の社会空間的な拡大をひとつの変数として取り出したことは、権威研究における今後の研究を促進する上で重要な貢献をなしたと評価できる。

よって、審査委員会は本論文が「博士（文学）」の学位を受けるに値するものであることを認定する。

平成 18 年 1 月 10 日

主任審査委員 早稲田大学教授 正岡寛司  
早稲田大学教授 坂田正顕  
早稲田大学教授 和田修一